

エチオピアの教育と現職隊員としてできたこと

富永 栄治

(18-1, エチオピア, 理数科教師, 延岡市立東海中学校)

まず任国に関していくつか紹介します。国の宗教はキリスト教です。実際はイスラム教徒と人数は半々なのですが、エチオピアは古い歴史を持っており、その経緯からキリスト教を国教としました。そのため、歴史的な遺産も沢山あり、世界遺産が 8 つ登録されています。アフリカではナンバー 1 の登録数を誇る素晴らしい国です。しかし多くの人はこのことを知りませんし、アフリカで有名な世界遺産はタンザニアのセレンゲティ国立公園やエジプトのピラミッドなので、もっと多くの人々にこの素晴らしさを発信していきたいと思っています。次に、特産物として有名なのはコーヒーです。『エチオピア』=『コーヒー』と言っても過言ではないくらいで、これは物凄くおいしいです。是非、現地でコーヒーを飲んで頂きたいと思います。もう一つ有名なものを挙げるとすれば陸上競技（長距離）です。先日もマラソン大会や、国対抗の駅伝大会でエチオピアの選手が活躍していました。続いて、人種・民族について。テレビ番組でよく紹介されるユニークな民族が南部に住んでいます。唇に穴を開け、その中に皿を装飾品としてはめている民族なのですが、すべてのエチオピア人がこういう訳ではありません。ただ、田舎の子ども達は裸足だったりします。エチオピアといえば、裸足のランナー『アベベ』が有名ですが、未だに裸足の子もいるという現状です。次に街の状況に関して。首都アジスアベバが私の勤務していた街ですが、やはり首都は都会です。ただ、都会ですが、まだロバや馬が交通手段として使われていたり、家畜の羊や山羊がよくうろうろしていたりします。アジスアベバは“大きな田舎”と形容されることもあります。また、驚くことに道端には路上生活の人々が多くいて、中には生死の判別できないような人も沢山いました。悲しい事実です。アフリカと云ったらこの国もこのように同じ現状かと思っていたのですが、旅行でタンザニアとマラウイに行ったら驚きました。全然違うのです、街の状態が。エチオピアというのは途上国の中でも、厳しい状態であるのだと他のアフリカ諸国を見ることで分かりました。（他の発表者の任国であるナミビア、タンザニアなどは豊かな発展している国なのだと、私から見たら思える国です。）

それでは配属先の概要を紹介します。エチオピアの協力隊派遣の歴史は古いのですが、教育分野に派遣される歴史は浅く、過去に理数科教師派遣は数えるほどしかありませんでした。私の派遣先はアジスアベバの高校でしたが、私が最初の隊員派遣であり、学校に外国人は私だけでした。生徒数は非常に多く約 4200 人。この内訳は、学校が足りないので午前と午後の 2 部制になっているためです。私の専門は数学でしたので、数学教師として赴任しました。意外だったのは学校には制服があったことや、毎朝全校集会を行い、国歌斉

唱と国旗掲揚をすることです。教室では長椅子・長机に生徒がギュウギュウ詰めで、1クラス90人から100人位います。この人数相手に授業するのは最初大きな不安があったことはお察しいただけるかと思います。

活動として、一つめにやったことは、もちろん通常授業です。教師として来ていますので、授業に全力投球させて頂きました。そこで感じたことは、生徒は日本もエチオピアも変わらない、ということです。黒人だろうが黄色人種だろうが、途上国だろうが先進国だろうが関係ない。例えば面白いことに、高校生ぐらいになると勉強するのが嫌いなのです。日本の子ども達も授業中に「面倒くさいなあ、面白くないなあ」というような表情をすることが多いですが、エチオピアの子ども達も結構そんな感じでした。「学校に何しに来ていいのかわからない」「とりあえず来ている」という状態です。もちろん、そこを面白くして、学ぶことに意味を見いだすような授業をするのが私たちの仕事なのですけれども。私達は学校や教師が少ない途上国に派遣されているのだから、「子ども達は学びたい意欲で溢れているのだろう」と勝手に思いこんでいましたので、この現状はある意味ショックでした。ただし、エチオピアでも地方の学校がない所は別です。JICAのプロジェクトで、地方に小学校を建てるという案件があったのですが、そこでは「うちの村にやっと学校ができた！勉強ができる！」と子供達が目を見輝かせて授業を受けています。学校ができたことに地域住民みんなが喜び、誇りを持っています。ところが、もう学校があって高等教育も普及してくる都市圏では、子ども達が学校に来ることがある程度当たり前になってきて、先述のような感じで授業を受ける子ども達が多くいる。なんだか、日本と一緒にだなぁって思ったのはそういうところです。ただ、エチオピアの高校での授業は、受験のための知識偏重型の講義ばかりで、面白みが無かったのは事実です。受験の結果でその後の人生が全て決まってしまう教育制度だったために、点数に固執した受験教育になっているのはやむを得なかったのだと思います。こういう面で、本当の勉強するおもしろさを知らない・伝えられていない子ども達は非常にかわいそうだと思います。

それから、驚いたことにプラズマテレビが教室にありました。エチオピアは、教師数が足りない・教室が足りないということを補う手段として、テレビを配置したのです。日本でいったら教育テレビ番組を想像して頂いたらいいのですが、テレビを使って授業をしようという政策をとっていたのです。評価制度とか免許更新制とか、教師の研鑽が求められる日本とは正反対です。このテレビは、ボロボロの教室に立派な日本製の大型のものが備え付けられていて、非常に不自然な光景でした。（設置には、諸外国からの援助がかなり入っていたと思います）エチオピア人は日本製のテレビを見て、「日本も同じようにテレビを使って授業をしているのだろう。」と勘違いしておりまして、「いや違う」と、誤解を解くことが、私が日本の教育現状を彼らに伝える最初だったような気がします。ただ、このようなテレビがあったとしても、電力供給が不十分だったり機械の不具合があったりすることもあり、使えないことも多くありました。その時はテレビなしで授業を行います。しかし、途中からちょっとテレビが不具合になると、生徒が「先生、テレビを消して先生が授

業をしてくれ！」と言うようになってくれたのが嬉しかったです。最初、戸惑いながらの授業でしたが彼らが私の授業を認めてくれ、分かりやすいと感じてくれた結果でした。

ただ、正直なところ私は英語が大の苦手で、非常に苦勞もしました。それに、教科内容ですが、エチオピアで教えていたのは高校数学になります。私は中学校教員ですので、教員経験はあったとしても高校数学の内容を教えるのは初めてでした。このように当初、授業を行うにあたって不安要素は多くありましたが、先述のように生徒が認めてくれるまでの授業を行うことができたのは、今まで現職としてやってきた経験が大きく役立ったと思っています。実際、授業を行う力（授業展開力）は英語力とは別の力だと自分では信じていました。質問や板書の仕方・教材の工夫・生徒とのコミュニケーション・生徒指導力など、現職教師として経験を積んできて本当に良かったと思います。もちろん、最終的には「どげんかせんといかん！」という熱意が必要不可欠だったのは言うまでもありません。

このテレビ以外にも、途上国でするので学校現場には多くの問題がありました。小さい問題でいくと、例えばテストの問題。教師間でテスト問題を事前にチェックしあうことが無かったため、テスト問題自体に多くの誤りがあつて、テストの最中によく生徒からクレームが来ました。私がテストを作ったわけではないのに、数学のテストだったら当然数学教師である私にも文句がきます。そこで、日本では当たり前ですが事前にテスト問題を確認しあうようにしました。もちろん、これは簡単にそうなるわけではありませんでした。自分から働きかけて、ようやくテスト前にそういうチェックを教師同士お互いにできるようになりました。次に教師の問題。実はエチオピアでは教師という職業が非常に人気のない職業で、賃金が安いということが一番の問題でした。そのため、40歳以下の若手の教師はみんな転職を考えています。すごく授業が上手かったり、生徒から慕われたりしている先生程、力があるため転職をすぐ行うのです。そういう同僚に対して、「子ども達のために頑張って教師を続けたほうがいいのか？」と私が言うのは勝手ですが、その人の人生を考えたら転職して高い給料を貰った方がいいと思えるため、この問題はすごく難しい事だと感じました。

二つめに行った活動として、セミナーがあります。理数科教師として、理数科のおもしろさを実験や操作活動、興味深い問題を通して感じて欲しい、という思いで通常授業とは別に、週末や休暇を使って他の理数科教師隊員と共に国内各地を回りました。いろいろなワークショップ形式にしたり、数学では、はさみで折り紙を切らせる操作活動をしたりグループワークをしたりしました。対象は高校生に限定せず、小学生向けにも行いました。このように対象を幅広く、「依頼されたらどこにでも行って授業しますよ！」というスタンスで行って行きましたので、私自身も楽しくやっていました。場合によってはセミナーに同僚のエチオピア人教師にも参加してもらうこともあったのですが、彼らも楽しんでいただいているように思えます。また、学校があまりない地方に回って授業をする方が、生徒達の関心も高く、感動していたように思いました。それから、同時に核や原爆に関するセミナーも行いました。ちょうど私が赴任した当時は、北朝鮮が核実験を行った時で、このニュースが世

界中に報道されていました。同僚から、「おいエイジ、日本は今大変じゃないか。北朝鮮にミサイルで狙われているぞ。お前は日本人として核に対してどう思っているんだ？」というような質問をされたりしました。日本は唯一の被爆国ですし、私は以前広島に住んでいたこともあったので、きちんと核に関する思いは伝えなければならない、と考えました。もちろん、理数科教師としては、セミナーで科学技術の素晴らしさも伝えるのですが、同時に使い次第で恐ろしいものなのだというのも一歩踏み込んで伝えたいと思って行きました。科学の功罪の両方を伝えること、そしてそれをどう使うのかは私達人間次第なのだ、という非常に大切な事で、道徳的な扱いにもなりました。もちろん、原爆に関するセミナーは科学的にも歴史的にも正確に伝えたかったので、広島の平和祈念資料館に協力をしていただき、送って頂いた資料を使用するなど工夫しました。

結果的にこれらのセミナー開催により、多くの子ども達に理数科の面白さを伝えることができたと思います。しかし、私達日本人がエチオピアの子ども達に対して授業をすることで終わるのではなく、エチオピア人教師がこういう素晴らしさを分かってくれないと意味がない、日本人がいくらやっても現地のエチオピア人に根付かないとダメじゃないか、どうにかしてこれらの教育理念や教育技法を伝えることはできないか、ということが私達理数科教師の最終的な目標でした。もちろん、セミナーは私一人がやってきたことではなく、全部の理数科教師隊員で頑張ってきたことなのですが、この努力が実り、エチオピアの各地にある教育事務所の所長と話をしたり、最終的にエチオピア教育省の副大臣と話をしたりすることが出来ました。（日本で言うと文部科学省の副大臣という立場のすごい方です）私の任期の最後には、エチオピア人教師向けに同様なセミナーも開催することができました。これは大きな成果だったと思います。ただ、現実的な問題として、先述のように教育課程は学校ごとの枠ではなく、国の政策です。エチオピアの高校教育の方向性が受験一辺倒であるという事と、テレビを使わないといけないという縛りがある以上、私達が理想とする教育は普及・継続が難しいというのも分かっていました。今後の協力隊の理数科教師をエチオピアに派遣していく方向性の問題にも関わります。そこで、最終的にそのようなテレビが配置されていない小学校高学年の段階で私達が理想とする理数科教育をやっていたらいいのではないか、という方向性まで JICA エチオピア事務所の方と探ることができました。私達の活動は微力ではありましたが無力ではなかったと思っています。これは先輩隊員から続く努力の賜であり、今後の理数科隊員の活動につながることで信じています。

また、メインの活動ではありませんが三つ目の活動として、地域で補習授業を行いました。学校での通常授業は教育課程の制限がありすぎて、自由に授業ができなかったのです。結局は受験のための授業で、生徒の点数をどう上げるかということが問われた部分でしたので、派遣前にイメージしていたものとギャップがありました。むしろ「教室がなく、青空の下で授業するのが協力隊ではないか！」というのがイメージだったのですが、行ってみたら全然違ったので、自分が自由に授業できる地域に出かけていきました。もちろん

本当は、私は自分の学校で放課後に授業がわからない子ども達を集めて、補習をしたかったのですが、放課後は同僚のエチオピア人教師が副職として塾みたいな事をして月謝を生徒から受け取っていました。そこを日本人が補習を無料で行ったら、金をもらってやっている同僚の立場が悪くなるのです。そのため、自分の学校ではできなかったわけです。ただ、彼らが悪いのではなく、貧しいが故に、少しでもお金を稼がなければならない実態があるため、その現状も仕方がないと思いました。彼らもお金を稼ぐために必死なのです。そこで、最終的にどこに行ったかという、他の協力隊の保健師隊員が訪問看護で回っていたエリアのコミュニティに自分が出て行って授業をしました。そのコミュニティはエイズ患者が多く、親がいなかったり貧困層が多かったりしたため、子ども達が無料で補習授業が受けられることは、彼らにとっても、そして私にとっても、ラッキーでした。授業は自分のペースで、彼らの分からないところをじっくり取り組むことができました。また、教員経験のない同期の理数科隊員と一緒に、その補習授業を使って授業研究会をしました。同期の隊員がうまく授業ができないと悩んでいた時期もあり、お互い授業を見せ合い（日本でいったら研究授業）、授業の帰りに喫茶店に行ってコーヒーを飲みながら、現職参加の私がアドバイスしたり、授業方法の議論をしたりしました。

他にも、四つ目の活動として開発教育ワークショップというのを行いました。協力隊経験者は、帰国後の社会還元が求められています。特に現職参加の私の場合は、これが大前提で行きますので、「帰ったらどういう事をしよう」と思いながら活動をしたのですが、他の隊員がすべてそういうことを考えて活動しているかというと、決してそうではありません。この社会還元活動の具体的方法論は、私が派遣された平成18年当時、そこまでクローズアップされていませんでした。しかし、帰国後「出前講座」と題して協力隊経験者は学校で講演活動を行うことが多くあります。その為、任国にいる時に、どのようにすれば講演をうまく行えるかみんなで学びましょう、と提言してワークショップを開きました。言わば開発教育をみんなで学びあったのです。対象はエチオピア派遣の全隊員にJICA事務所を使って行いました。もちろん教育分野の隊員だけではなく。ただ、私のような教師経験者は学級活動や道徳や総合的な学習の時間で使う手法が講義をするときに有効だということを知っています。発問の仕方、現地の物や写真・映像の見せ方、現地語をしゃべる、…など、どういうふうにやればうまく伝わるかという事をみんなで一緒に考えました。このワークショップをすることで、今の自分達の活動や任国であるエチオピアを見直すこともできましたし、他の隊員の活動も理解することができました。また、派遣中に画像として記録しておいた方がいい物や珍しい現地の物などを集めた方がいい、といった視点も持つことができたと思います。

それ以外に、五つ目の活動として、エチオピア体操作成というのを行いました。これは日本のラジオ体操にあたる体操を、エチオピアで広めようとしたものです。エチオピアはダンスが盛んで、みんな各民族独自のダンスを踊れます。ところが、体育の授業で体操しようすると体操が全くできない。その現実を体育教師として派遣されている隊員がすぐ

く悩んでいたのです。日本人がラジオ体操をみんなできるように、エチオピア版ラジオ体操を作れないか、というのがこの活動の始まりでした。もちろん、日本のラジオ体操を押しつけるのではなく、あくまでエチオピアのオリジナル体操を作り、普及・定着させていこうとしたのです。現地の方やダンスが専門の方、そして体育の隊員を中心にエチオピアの民族ダンスを取り入れた体操を作りました。現在もエチオピアで普及活動継続中です。テレビ番組で放送したり、イベントで披露したりと地道に普及活動が続けています。

これらの活動を通して苦労したことは、まず言葉の問題でした。授業での苦労は克服できましたが、エチオピア人生徒が抱える細かい問題・深い問題は外国人の私にはわかってやることはできませんでした。日本でもそうですが、特に家庭に問題を抱えている子どもがやっぱり一番難しいです。そういう生徒は、結局学力が低くて英語がしゃべれないので、悩みを聞いてやりたいけれども、現地語があまり喋れない自分には理解するのは難しかったです。また、その苦労以外にも自分は大した活動をしていなくて、他の人の活動がどうしても素晴らしく見えてしまった時がありました。「一体自分は何をやっているのだろう？」と悩む日々もありました。しかし、「隊員活動は別に誰かと比べるものじゃないんじゃない…？」と友人からアドバイスをもらい、励みにしたりしました。また、アジスアベバが首都だったので、日本人と会う機会が多かったのですが、最初は日本人に会いすぎたような気もしました。せっかくエチオピアに来たのに、週末など日本人という時間が多いのではないかと悩んだりもしたのです。しかし、逆に首都隊員だからこそ、いろんな人とのネットワークをつなぐことができたのも事実です。日本人と一緒に居すぎるというマイナスもあったのですが、悩んでもしょうがない部分でもあったので、逆にその人たちとのコミュニケーション、ネットワークを作ろうとプラスに活動しました。その結果、活動の目的は一緒である韓国の JICA みたいな団体である KOICA のボランティアの人や、現地 NGO の方々と協力して子ども達のためにセミナーを共同で開催しました。また、日本から大学の教授や学生さんなど多くの方が協力隊の活動を見に来られました。国際協力分野を研究していらっしゃる教授に授業参観をしていただきコメントを頂くなど、いい刺激になりました。

次に活動で嬉しかったこと。これはたくさんあるのですが、まずは「いろいろなものの見方、考え方に触れられた」「自分も幅広い考え方ができるようになった」ことです。日本人の協力隊員だけでも様々な人がいます。それだけで異文化、というほど協力隊に参加される人は個性が強く、刺激を受けました。そして、もちろんエチオピアの人々。人種も民族も歴史も伝統も宗教も全て違う人たちからはこれ以上のない様々なものの見方・考え方を学びました。もちろん、違いすぎて打ちのめされることもあり、腹立つことも多かったのですが、大半の協力隊員も同じ経験をされているでしょう。しかし、最後に救い・助けてくれたのも彼らエチオピア人であり、彼らの優しさにもたくさん触れることができました。また、最初にも述べましたが、「子どもは日本もエチオピアでも一緒だなあ」ということ。特に、『“エイジ”の授業はわかりやすいよ！』と言ってくれたのは教師冥利に尽きる嬉し

い一言でした。そして、理数科教師の活動の締めくくりとして嬉しかったのは、「教師向けセミナーが最後にできた」ということでした。

最後に、これから協力隊として派遣される皆さんに対して、おこがましいですが、私からアドバイスを贈りたいと思います。大変なことや苦勞の連続でしょうが、もっとも根本・原点となることを忘れないで欲しいと思います。「自分はなぜ協力隊に来たのか」ということです。私は参加したくても、本当は参加できなかった立場です。実は毎回協力隊に受験して不合格でした。それも健康上の理由からでした。三回目の受験で協力隊への挑戦は最後にしよう、諦めようと思っていた時の合格でした。まるで奇跡的でした。だからこそ、参加できた事だけでも感謝です。参加したくても参加できない人もいます中で、本当にありがたいです。そして、「せっかく来たのだからやれることやりましょう」と言いたいです。もちろん、ただひとりでやれることには限界があると思います。いろいろな活動ができたのも多くの隊員や様々な現地の人がいたからだだと思います。結局はチームワークです。また、私が好きな言葉ですが、『No pain, No gain. (痛みなくして得るものなし)』『僕の前に道はない。僕の後ろに道はできる (高村光太郎)』です。活動中、これらの言葉からたくさんエネルギーをもらい、励まされたので紹介しておきます。

それから、エチオピアという外国に身を置いたからこそ、はじめて日本の姿を見ることができたと思ったことがあります。エチオピアを通して、常に日本を意識していたと思います。同時に、日本が世界からどういう風に見られているかということを感じました。やはり世界の経済大国ですから、途上国ではそれなりの目で見られているのです。特に、赴任してすぐの研修会でエチオピアの大臣が「ジャパン、ジャパン」と叫んでいる演説を聞きました。現地語だったのでそれ以外のフレーズはわからなかったのですが、同僚に意味を尋ねたところ、「日本は資源も何も無い国だけど、教育でこれだけすごい国になった。エチオピアも日本と同じで資源がない。だから私たちは日本を見習わなければならない」と演説していたそうです。私たちの知らないところで途上国の人達は日本をそういうふうに見ていたのだと思うとショックを受けました。その直後に思ったことは、「昔はそれに値したかもしれない。しかし、今の日本はどうだろう？」ということでした。もちろん、日本は豊かな国です。しかし、今の状態…特に教育現場を見た時など、胸をはって日本は素晴らしい国だと言い切れるでしょうか。

現在、私は中学校2年生の担任です。帰国して、まずは日本に慣れることが正直な課題でした。今だから笑って話せますが、4月1日付けで復帰した最初の職員会では情報量が多すぎて、思考停止してしまいました。もちろん、エチオピアに赴任したときもそうでしたが、まずは日本での新しい教師集団の中でみんなからの信頼を得ることが第一だと思いました。確実にやるべき事をしっかりやっていく。それ以外は、少しずつやっているところです。学級活動や道徳、出前講座等で、自分が学んだこと・感じたことを少しでも日本の子どもたちに伝えていきたいと思っています。子どもは宝です、日本の…いや、世界の明日を担う国際人を育てる一助になりたいです。今後は日本で、協力隊として得た貴重な経

験を活かしていきたいと思います。

以上で発表を終わらせていただきます。